

編 集 後 記

最近、消化器外科の魅力と問題点について考える機会があった。外科医師の志望者が世界的に減少傾向にあり、それは日本でも同様であるが、われわれが担当している消化器外科を発展させるためには、若い医師にその魅力を理解してもらえるような努力が必要である。私は日本消化器外科学会における仕事をいくつもお手伝いしてきたが、本学会誌、消化器外科専門医制度、教育集会の3つは若手医師をはじめ中堅医師に対して学会が全面的に支援する良いシステムであると思う。

本学会誌の編集委員会は毎月1回、委員長以下18名体制で、教育的配慮のある編集作業を行ない、その結果採択率は過去2年間76%の高さを維持している。私が編集委員に就任する前に、直接指導した後輩の投稿論文が懇切丁寧に査読され、最終的に本誌に掲載された経験をして、その面倒見の良さに驚いたことがあった。私はいくつかの学術雑誌編集委員会に関わっているが、学会や編集委員会の考え次第でその方向性は異なるようである。本編集委員会では貴重な投稿論文をなるべく採用する方向で修正や訂正を投稿者に指示している。投稿者を育てる姿勢が本誌の特徴である。

論文作成には指導者と被指導者、執筆者と共同執筆者の共同作業が欠かせない。若手医師自身が精進することは当然であるが、若手医師にとり、臨床の現場では優れた指導者が必要であり、それは論文執筆にも当てはまる。チーム医療が必須の消化器外科では、常に指導者と被指導者の良好な関係が大切である。論文発表の場として、親身の指導体制をとる本学会誌は最適であると確信できる。

原著論文よりも症例報告が本学会誌に投稿されることが多い。その実態は諸般の事情のためと理解せざるを得ないが、症例報告においてその中で取り上げられている症例から学ぶ姿勢が伝わってくると、読者として感心させられると共に勉強になる。忙しい日常臨床の現場では、日本語で記載された症例報告や原著論文は理解しやすく重宝するからである。

私も指導者の一人として後進を指導して本誌の掲載に値する論文作成に努めたいと思う。最終的には一人でも多くの若手医師が消化器外科を目指すことを希望し、多くの消化器外科医がその学問的水準を高く維持できるような環境整備に本編集委員会業務が貢献できれば幸いである。

(小澤壯治)